

<博士論文概要>

「コト八日」の祭祀論的研究
—神去来思想による稲作一元論・祖霊一元論を超えて—

本研究の目的は、伝統的な年中行事「コト八日」に対する通説の基盤となっている柳田民俗学の思想、すなわち稲作一元論・祖霊一元論から「コト八日」を解放することにある。そのために本研究では、稲作一元論・祖霊一元論において「田の神・山の神去来信仰」に一元的に吸収されている「神」と「妖怪」を本来の場に取り戻し、そのうえで「コト八日」を再解釈していく。こうした試みは、柳田民俗学をひとつの基盤としてきた日本文化論に一石を投じることになるだろうし、日本の基層文化を構成しているといえる神観念の新たなる側面を見出すことになるだろう。本研究の学術的意義は、まさにここにある。

まず第1章では、戦後日本民俗学の稲作農耕儀礼説における「コト八日」の解釈をとりあげ、その問題点を指摘した。そこでは、「コト八日」が2月8日と12月8日におこなわれる年中農事であることを踏まえて、この行事が「田の神と山の神が交替」することを意味しているのだとされている（稲作一元論）。換言すれば、それは田の神＝山の神という論理である（祖霊一元論）。この論理では、恵比寿・大黒などの「神」は田の神に吸収されることになる。また、一つ目小僧・疫病神・鬼などの「妖怪」も、山の神零落説をもとに山の神に吸収されることになってしまう。つまり、祖霊一元論では、同一化されているさまざまな「神」と「妖怪」は、本質的に同じ性格なのかが検証されないまま、「田の神・山の神去来」信仰に吸収されてしまっていたのである。

こうした問題点を念頭においたうえで、第2章では「神」と「妖怪」の明確な相違を論じつつ、「神」を分析対象とした。空間論的視点から分析すると、「田の神と年神の去来」信仰の性格があきらかになった。田の神と年神の去来（交替）は、2月と12月のいずれかの日にコトハジメ・コトオサメという呼称をともなうことが多く、必ずしも8日を祭日とはしない。つまり、コトハジメ・コトオサメは農耕期間と正月期間の交替日に位置づけることができるのだ。一方、祭日の8日を軸とすると、山の神と「妖怪」の関連性があきらかとなった。ここで、折口の依代説と山の神の両義性を分析視点として導入すると、「コト八日」で軒先に掲げる目籠は、強い力をもつ一つ目小僧（山の神の異形）の依代と捉えることができる。これにより、一つ目小僧伝承は「災厄除けを目的とする依代による神迎え」と位置づけることができよう。

第3章では、現地調査をおこなった長野県松本市の7つの集落におけるムラの「コト八日」に着目した。これにより、第2章の「山の神＝一つ目小僧＝境

界の依代」という定式から導き出された来訪神信仰の検証と、「風邪の神送り」「貧乏神送り」などから来訪神と祟り神の祭祀構造や信仰の相違を明確にできると考えた。調査結果を境界論的に分析すると、来訪神は依代として具現化されるが、そこには擬人化・人格化の傾向がみられた。さらに、人（とくに子供）そのものに依り付くものとされる場合もあった。とすれば、松本市の事例からは「来訪神（擬人化）＝依代＝神迎え」という祭祀構造がみてとれよう。一方、神送り行事には鎮魂思想を基盤とする祟り神祭祀が根底にみられ、その祭祀構造は「神送り＝祟り神祭祀（直会・神人共食）＋送りの呪術」と考えられる。神送りに百万遍の念仏が習合される場合、「コト八日」は、純粋な死者のための仏教的供養ではなく、祟りをなす死霊を宥める（鎮魂）ための現世利益的な供養という性格を帯びることになるのである。

第4章では、再度イエの「コト八日」に立ち返り、祖霊一元論によって山の神に吸収されている「妖怪」を分析した。その際、これまであきらかとなった「来訪神（擬人化）・山の神＝依代＝境界」と「祟り神＝直会」という祭祀構造を考慮しつつ、イエとムラの祭祀的関わりから分析をおこなった。その結果、イエの屋敷に出される掲示物からも、災厄や祟りを鎮める来訪神の擬人化的特徴がみられた。この来訪神祭祀（境界の依代）については、儀礼食や（祭祀空間の庭などにおける）掲示物の食物が祟り神祭祀（直会）となっていたことから正しいと思える。このように、村落空間と屋敷の間には、祟りや災厄をめぐる神格による明確な祀り方が習合化されつつ存在しているといえる。そして、祟りを「神」と祀り上げる鎮魂思想からは、災厄や祟りの基盤に死霊信仰が潜んでいることを窺うことができる。しかし、これらの祭祀の性格は、近代化にともない魔除け化されていくことになる。その変遷過程が「コト八日」には明らかにみてとれる。

以上の分析結果を踏まえると、通説のように、「コト八日」は「田の神・山の神去来信仰による稲作農耕儀礼」として一元的に捉えられる行事ではない。この行事には、次のような2通りの祭祀的性格ないし意味が潜んでいるからだ。

- ①田の神と年神の去来による農耕かつ正月祭祀の性格。農耕期間と正月期間の交替日として、「コトハジメ」「コトオサメ」の呼称をとまなうことが多い。
- ②来訪神祭祀（山の神の両義性による一つ目小僧、擬人化・人格化の依代）と祟り神祭祀による災厄除け的祭祀の性格。とくに、ムラでは「八日送り」、またイエでは「八日節供」として行われることがあきらかに多い。この「コト八日」の「8日」に災厄除け・仏教の祭日・山の神祭日の関連性が潜んでいることを考慮すれば、一つ目小僧とは、「一つ目(山の神)+子供(擬人化来訪神)+民間宗教者化(僧侶)」のような歴史的変遷を遂げた「まれびと」といえると考えた。

このように、「コト八日」から、稲作一元論・祖霊一元論という、ある種の先入観を取り払い、「神」と「妖怪」を本来の場に取り戻してみると、そこには「コト」と「八日」をめぐる民俗世界の、より広いパースペクティブがひらけてくるといえるのではないだろうか。